

要するに、相互争闘は、主源体そのものによる衝動的行為ではなく、環境によって誘発された、排他的な積極的意識活動の結果であり、主体性として持つ、本能それ自身による秩序と美と、人間そのものの美を、常に傷つけて止まない、あやまてる意識活動の結果であり、善と悪とを仮定するならば、人間自ら作り上げた、悪の最高の、併も露骨な現象である。

故に環境の变革と、思想的自己解放の如き、意識活動に於て、この悪を、この野蛮なる弊習を抹殺する事は可能である。

史 観

一、本能論史観としての概要

本能それ自体は、一切の行為と動作の主因であり、存在そのものの決定的要素である、と共に、意識以前の主体であり、生物万般に共通する、自然の賦与する秩序である。

本能とは、もともと内在する描かれざる主体の歴史であつて、文化に、経済に、生活に、思想に、哲学に、進化に、その総べてが内包する主動的部面であり、人類史にとって、欠く可からざる一素因である事は、論ずるまでもない事である。

人間性の発展や個性の拡充が、歴史の各項に、くまなく創造と進化を色彩するように、人間にとって、無支配、無権力、無拘束の本能現象にこそ、主体的実相を見得ると共に、自由と平和と幸福の源泉であり、併もそれ等を常に希求して止む事なく、意欲し続ける、そのものの主体と云う可く、人間性の最も無理のない自然な姿であり、しかもなお、独立と個性を平等に保証し、実証する存在の基点である。

即ち万世物の持つ自然体であり、人間生活に於ける基本的実体である。

これに反し、相互争闘は、環境的派生感念を主動因とする人為現象であつて、本能その

ものにはなく、若しこの争闘本能なるものがあるとして、仮りにこれを極論する事がゆるされるなら、人類は掃滅し、あるいは毎日に縮減し、増加しつつある現実は成り立たない事になる。

とは云え、食わずには生きてゆけない生物にとって、何等かの意味で繰り返えされずにはすまされない、異種属間の相互利用とか、そのために生じる相互争闘をも否定するものではない、要は同種属間、特に人間相互間に対する問題の提起なのである。

これを実証する為めには、多くの説明を必要とするのであるが、余りにも多くの実例を、日常些煩事にまで目撃する事と、それを反証する社交性本能に於ける実証が、人類史にはたして来た役割りの、無量な数に昇る事実に対し、そのわづらわしさを除く為めに、ここでは、二三の記述に留めて置く。

およそ自己の生命の安全が脅やかされ、保証される事のない結果は、自らたつて防衛せざるを得ない事は、自己保存の本能の必然的経路であり、併も人間は他の諸動物と異なり意識的に、且つ積極的に、何事をも遂行し得る能力を持っている、と共に、それを行動化する特殊生態である。

即ち、自己保存の本能の、経続化とも云い得る、意識的に遂行する積極的行動現象がそれである。

自己不安に対する防衛の為めの意識活動や、環境に刺撃された為めの、意識的行為の結果以外には、相互争闘はあり得ないのであって、自覚的意識活動の中にこそ闘争の素因があり、本能そのものの無意識的、意識以前の現象、及び行為には、共同の秩序こそあれ、混乱と無秩序と相互争闘はあり得ないのである。

生命の安全に対する脅威の排除や、自己の意志と行動の拡充を求める、発展過程にあつて、平和と幸福を求め、自由を欲する故に、故意にかもされる妨害、又は不快な障戟に遭遇する結果、それ等を排除しようとする、闘争の為めの意識を喚起し、相互争闘が惹起されるのである。

即ち、資本主義下に於ける商人間の商業的争奪行為や、支配機構内の地位の争奪や、主流反主流の権力奪取の為めの闘争は、この間の事情をよく物語っている。

又、種族保存の本能が、対者を獲得し得ない環境に遭遇し、意識活動となつて争奪的形態を喚起し、波乱ん呼ぶのである。

その他、環境が誘発する、生命群に対する脅威が、期せずして相互集団化し、防衛的抗争形態を描き出したものとして、苛酷な年貢に死を決して蹴起した百姓一撥や、暴動、反乱、米騒動の如きものも想起される。

これは、社交性本能からの誘発意識に於ける、結集的自己防衛の形態と云い得る。

思うに、本能そのものは、人類に、自己及び相互の治安と秩序とを、その人間性に於て持続し、現実の繁栄をもたらした、と云い得ると共に、その反対面である、反社会性と無秩序と混乱を意味する、相互争闘的環境を意識的に作り出した、その事の爲めに、自ら内包する、人間性に逆らう、無自覚故の意識活動が、主体的衝動によって作り出される美と尊厳とを、常に傷つけ、排他争闘の、環境的派生感を助長するに至った。

いわば相互争闘の史実は、精心的墮落史としての一面を、人類史の中に織り込む結果になった、と云い得るのである。

この墮落史は、その反対面である、主体性に対する自覚と云う、内在する主体への認識によつて、本然性の顕現がなされ、正義と自由と友愛と平和に充ちた、正常な歴史にまで還元し、進歩発展がなし得るのであり、総べての初めがそうであつたように、永遠の平和と自由、平等な協働と云う栄光を把握し、総べての思想が、窮極にこの美と尊厳を加味する事なしには、思想も哲学も、その価値を喪失するであろう。

即ち秩序の主体は、強権的、人為的な、あるいは派生的なものに重点を置いた、後天性のものにはなく、自然そのものの賦与による、主体性そのものである、本能そのものにこそ存在するのである。

現実には、本能的な主体活動と、環境的派生との綜合的事象であつて、環境は、本能的主

体そのもののえの自覚、又は無自覚に於て、善にも惡にも変換し得ると共に、不平等の根元もここに産れ、美にも醜にも転換が可能である。

本能自体には、強制も支配も必要とする事のない、自然そのものからの賦与をその儘に、平等と秩序と美と尊厳を保つ可く、過去より現在に至り、未来を、生存の限りに於て保証され、その存在が約束されている。

永かりし過去と、長からむ未来は、この本能による秩序と繁栄とは、それ自身の意識的顕現によつて、保証、堅持され、併も常に昇揚す可く努力され、あらゆる創造と発展の基源となすであろう。

これは、人類生存の限りに於ける、永遠の希望であり、根底ある勝利への道である。

要するに本能は、人類史にとつて描かれざる主体の歴史であつて、文化に経済に科学に、進化に、そして日常の生活の中に、その総べてが内包する主動的部面であり、秩序の最高、最善の在り方を教示し、人類史にとつて欠く可からざる、重要な一素因である事を実証するものである。

なお、平等にして、無支配、無権力、無拘束の、本能的主体的実相こそが、自由と平和と幸福の源泉であり、これえの確たる認識と、その意識的な積極的發展こそ人類の断ゆるなき希望であると共に、人間のみによる、人間の史実を意義づけるものであり、断えざる

努力の歴史として想起す可きである。

二、意志による創造としての史観

人間としての個性には、その特殊性の偉大なものとしての一つに、意識活動に於ける、積極的な意志力を持つてゐる事である。

人類は猿ではなかった、彼等は猿とは異なる意志力を持ち、その意志は、初めに木片を持つて、手の届かない所にある食糧を、はたき落す事を意識活動として経験し、石を投げ、石を刻み、罌を作る事を知つて、野獸を生きながら捕え、火を発見するに及んで、焼いて食う事を知り、焼いて物を作り、土器を作り、保存する事を考慮し、体験した。

かくて文化の土台は築かれ、永い鳥獸に等しかった生活から、人間独自の生活を発祥せしめた。

以上は、意識活動に於ける、意志に依る創造なしには在り得ない事柄であり、野獸同様の生活から解放された、人類史の最初の頁を飾る、美しい創造的意欲と、意識活動に於ける前進の一步でもあった。

即ち、他動物には見る事の出来ない、意志による創造と、意識的行為の積極性と飛躍的發展が、一つの文化として、人類生活の中に創造された時期であり、ここに至るまでの、

過去に於ける、猿とも見まごう生活から、永久の訣別をする時でもあった。

猿に近い生活の形から、人間独自の生活形態へ、突然変異に等しい、歴史の大変換がなされるに至つたのも、この時期であり、共にこれ等は、創造的意識活動に於ける、意志力なしには、為し得ない事実を物語るものでもある。

然るに人類は、未だ無知であり、蒙昧であつたが為めの、精心的未発達をまぬかれず、為めに、疫病や死は迷信を産み、恐怖は神を想像し、歓喜、悲哀、憂慮、願望、無知、等々が神々を想像した。

リングと云う生殖器（男根）崇拜から生じた神は、五千年以前に、印度のビダの神話として、人間生態の賑いを描き、それが欧州に入つて十字架となり、印度、支那を経て、日本に來つて卒塔婆になつたと言われ、あるいは、縄文石器の中にある石棒の如きあり、現にコケシ人形の如く、止揚され美化したもののさえある。

又、鳥獸崇拜は、トーテムポールとして現存し、なお太陽崇拜に精霊畏敬に、意識は意志に連鎖反応して進化発展を辿り、神々への想念は、その偶像や伽藍の形態が変化したように、持続されて現在をなしている。

総べてこれ、意志による創造としての歴史と云い得る。

この神々の想念は、当時最も知識的な者の相伝、又は家伝とする所となつて、司祭者を作り、大衆と神との仲介者を産む結果を生じ、やがては、慰藉と欣ろこびと予言の、權威

者をも作りあげるに至り、かくて人間による人間の、神の名による、命令と支配とを意識づけ、隷属の初段階をかたち作るにいたった。

以上は、意志の世界に於ける権力発生史として、今を去る、推定五千年の人類史上の一部面であり、意志し意識活動する事の可能な、人類にのみある一事象である。

初めに単調であつたであろう、意志疎通の爲めの言語が、意志の表示、及び遺留の爲めの必要から、複雑な進化を築き、絵を描く事によつて字を産み、字は文化の根幹となつて、体験の中に意識を高め、精進文化の素因をなすと共に、凡ゆる文化の底流となり、断えざる進化発展を未来に約束づけている。

文化史の源泉としての意志と識見は、蒙昧の過去に簇生し、その意識的行爲は創造意欲にまつて、衣服を纏い、食事情を変化させ、住居を穴居から堅穴、空間に解放せしめると共に、他方、平等であつた共同生活の破壊を、支配と隷属の階級的事象として現出し、各々その繁栄と固定化は、部属及び民族自身の、発展と防衛の爲めと称して、かつての狩猟用具を、人類殺戮の爲めの武器と化さしめ、弱少部族への蹂躪と奴隷化を生じた。

なおこれ等の多くは、守護神の名、又は神々の怒り、神の意志によるものと、司祭者によつて誇示された、支配者自身の意志と行爲によつて生じたのである。

武器はもと禽獸狩猟の爲めのものであつた、その名手は部属の誇りであると共に、生産者としての共同の英雄でもあつた。

然るに司祭者の指令や、名手（英雄）と司祭者そのものとの結託により、異端者又は共同の敵を撃つ爲めのものと化し、やがてそれ等の常備の必要から、通常の状態のものにまで変化し、固定化を伴い複数となり、大衆へ君臨する基礎となる、権力的支配の端緒が築かれたのである。

然もその階級的差異を、大衆自身の隷属的意識が、英雄視から忍従観となり、宿命観をも培い、抜き差しならぬ奴隷意識にまで発展せしめ、かくて、支配者に権力を附与し、自らその命に信服したと云い得ると共に、支配者そのものによる神々を利しての、自らの擁護行爲を見通し得ないのである。

およそ、支配するものの原始的在り方の中に、必らず折り込まれている意識行爲を、その神話、伝説の中に見出し得るからである。

『我は神の子』と云い、あるいは『天津みこ、皇孫』と云い、『我は神の使徒なり』と公言し、神との直結を、司祭者及び権力把持者が、民衆に君臨する、唯一の言葉とした歴然たるものがある。

現在の此の時点にさえ、その片りんを見聞する所である。

原始時代の神々は、共同福利、災厄排除の爲めのものであつた。

然るに、一度び、それが意識的に、権力支配者により民衆支配の爲めに利用せられるに及んで、神を呼ぶものは、支配者の地位に固執し、民衆は又それを承認許容し、服従する

事を当然のものとしたのである。

二、三世紀の頃の日本史上、北九州の狗奴国と、女王卑彌子との間に、大陸文化の独占をねらって、物資争奪のための武力闘争が展開されたが、これは支配権力が、民衆に対し、自らをより権威づけるために惹起された、民衆犠牲の上にたつた行為である。この行為は、支配権力の存在する限り、永久に変える事のない、強制と掠取と暴力の、運命的な実践そのものでもある。

時も此の頃、こうした権力闘争の産み出す苛酷を外に、出雲にあって、大国主命は帰化人（漢人？）少名彦と協力して、稲作、灌漑に努力し、国？土の経営、即ち共同聚落繁栄の為に専心した。そして、彌生時代後期の経済構造を完成した。

かくて、国境を越えた美しい夷りをもたらしと共に、他方混交融合の先鞭もつけ、又技術の広範囲に渉る、伝播の因を築き、あわせて、出雲地方の強固な結束をなし遂げたのである。

彼は神を口実にして掠取したり、利用したのではなく、生前の大衆に対する善意と功績とが、彼をして後に神たらしめたのであり、又、隣国の侵略者が、神の名、祭祀、呪術を利用し、又は政治的な妥協を計り、懐柔し、民衆を籠絡する手段として、作造された神なのである。

それあればこそ、日本神話の神々の中で、強奪や掠取、殺人のような血腥臭い匂いはな

く、豊かな人格と、優雅な性格を讃えられた神になっている。

やがて、女王卑彌子の死により、神意の喪失をまねき、支配力の衰微がもたらされ、再び苛酷な闘争の場となったこの地も、卑彌子の宗女、杵興と云う、神を掌握し司るものの出現によって、旧に戻るを得た。

併し、これらの経験は、いよいよ権力的な支配力の充実を援け、やがて来る、倭の五王時代を築く礎石となった。

もともと北九州が支配権力発生、及び争奪の地となった事は、北九州が、縄文時代、後、晩期の頃、先進国であり、戦争の断える事なかった、漢、朝鮮の流亡の民である、帰化人文化の洗礼によって、文化面のいち早く発展を遂げた土地でもあり、後には、その影響をもとに、彌生時代、古墳時代、の両時代の文化も吸収されたが、もともと彼の国の模倣と、類似行為を支配者は誇示しつつ、物資争奪のための戦闘発祥の地でもあったのである。

その時の圧制者であり、侵略者でもあった、強力な、宗教的、武力的、優越者であったものが、その側近であった帰化人の説を取り入れ、当時の先進国の風習に迎合し、漢、朝鮮の神話、又は伝承や民間信仰を輸入し、改ざんし、その王者を持って自認するものをして、漢籍の文獻を模し、利用して、天皇なるものが作りあげられたのであり、次后継続され現在にまで至ったのである。

彼の地の伝承に、朝鮮の加羅（任那）の亀茲峰に、降臨して首露王が出現したと称したり、新羅に電光の如く降臨した、赫居世、云々もあり、又中国の崑崙山は、天帝の時隔降臨する下都とあり、王は常に神の代人を自認した。なお、天皇の称号も中国の文献に記載されている。

これ等こそ、日本神話、及び、現になお呼称される「天皇」発祥の根拠である。

この時期にあつて神は絶対であつた。この事は、支配者への服従が神への信服を意味し、そこにまで、巧妙な変化をもたらした結果である。

かくて、人間による人間の支配が成立し、無知と蒙昧を唯一の原因として、その意志を行爲化し、意識の無明が、特権の支配層を肯定し、継続せしめた、と云い得るのである。この時代を総称して、祭政一致の時代と云う。

権力支配は、常に二つの意識行爲によつて成立する。

その一つは、絶対の立場を、指導者の名に替えてでも、民衆に押し付け肯定せしめるのが一つ、もう一つは、服従する民衆の意志がある、と云うその事である。

前者は、初めに神の名により、民衆を懐柔籠絡し、次ぎに、武器を擁して不動の地位を築き、民衆の隷属化を権威の名によつて強要し、やがて、その状態を宿命的にまで観念化する爲めに、初めに神の意志としての原始的慣習から、それを取り入れ、利用して、人爲の規定を作り、一種の法文化（習慣）を経て、拘束を常態化にまで、強制するに至つたの

である。

これを政治の嚆矢とする。

なお、人類は蒙昧の故に神々を信じ、神の言葉、又は神の意志と称する人間の作意を信賴し、自らの自由な、飛躍の意志を拘束され、やがて、神が莊嚴伽藍を備え、威嚴を保ち、偶像を配置し、權威を装い、宗教となり、政治に利用せらるるに及んで、自由と幸福と平和と、そして意志をも貢獻し、忍従服膺と云う去勢脱落の自己亡失を招き、延いては、掠取者であり、強奪者でさえある支配者そのものに対し、肯定是認の、阿片中毒的痲痺症状を現出するに至つたのである。

民衆自身の覚醒を原因とする、人智の意識化による発展に備えて、支配の強化は、武力の強大化と共に政治の巧妙化を辿り、ある時は武力制圧（警察力をも含む）により、又ある時は宗教や教育により、不動な搾取網を築くに至つた。

これは、初めは神の名により、次ぎに土地、その他生産資財の私有にはじまる労働力の掠取が、現今にまで持続されている事由でもある。

この点、社会主義、共産党政治をも含めて、の主張する土地国有制度は、国家資本主義又は官僚独占を意味すると共に、祭政一致のこの時代、又は班田制の搾取機構に類似し、あるいは逆行するものとしても大差はないと云える。

支配すると云う事は、支配される側の要求や希望を、常に一定の枠にはめ込むと云う強

制の矛盾を、支配すると云うその事に、常に欠陥として内包する結果、必然に暴露される宿命に陥り、強要するが為めの、反撥を常時惹起する。

ある時は權威に対する羨望を高め、又ある時は神ならぬ同一の人間であるとする、意識を呼び醒まし、かくて、支配權力そのものの転覆移行の機会は練られ、転換の氣運が作られる、と共に、対立する權力の必然として争闘となり、覇權争奪の為めの闘争を経て、支配權力は転移し來つたのである。

しかもその度び毎に、權力は強大化し、経験は巧妙化を生み、持続の時間を長くした。併し如何に巧妙化し、又如何に強大化すると、自由を奪い、幸福を左右し、平和を掌中に握る暴虐は、永遠を約し得るものではなく、この様な本元的な矛盾を底位に持つ如何なる巧言令色も、帰する所は、彼等權力支配者により、作り上げられた我田引水の正義であり、その都合な道德観をも含めて、いつかはその謀略も底をつき、破綻を見せ、宿命的なる破滅への行路を辿る。

これは、小數者により大衆の意志を強制すると云う、致命的な矛盾を、強權支配そのものが内包する実証にほかならない。

即ち權力支配は衰亡し興起する。意志による必然を今になお歴史に繰り返えしつづつある。權力把握者は、常に民衆を政治するに当り、被支配大衆が、單なる生産機械の部品、又は意志なき物質の如くあれかしと、無知による忍従を願ひ、生産する道具になれかしと教え、

權力の忠実な擁護者であれかしと法律を強いる。

ここに意志による創造の歴史としての、權力及び支配の、無理と矛盾を見出し得ると共に、転換の必然が呈示されるのである。

初めに神宣の統制が、偽瞞と懐柔策の暴露的破綻から、乱立する權力を産み、それが対立抗争を拡大激化し、戦国乱世の時を経て、最も巧妙な手腕を持つ、政治的武力的支配者により、封權制度が確立されたのである。

この時の政治とは、民意の權力者による意識的強制統轄であり、法度と云う、權力把持者自身の大衆に対する、經濟の専有に伴う、意志への忍従の強要である。

有史以前の生産物資は、すべて共有の性質を持ち、生産品は総べて神の給与する所であり、その生産品の一部は、神に対し返還の意味か、感謝を意味する任意献上の供物であった。

然るに支配者の發生は、神と供物の独占、又は横奪者を意味し、それが強權的色彩を帯びるに至つて徵用となり、やがては、強制徵収に変化した。

しかも、初めはこれが直接納貢の性質を持ったものであったが、支配圈の強大化に伴い、仲介者を要する様になり、側近を増大し、やがて仲介者そのものとしての独立体を作り、彼の仲介者は媚態、阿諛、と云う奴隸的意志をもって地位の確立を計り、又支配者は、地位と徒食を確立し安易ならしめる利益を、彼等に付与した。

こうした経路は、彼等側近又は仲介者が、支配の地位に介入し、その好機を捕え、機会を得て羽播く前兆であるとも云える。

これは日本権力史上に、神官、武官、次に僧侶、武將の発生が、彼等の抬頭と強大化を意義づけていると共に、意志による地位の転換、変移が着々と、効を奏しつつあった事例でもある。

なお彼等仲介者は、時には、個性と創造的意志による生産者から、武器その他を直接入手購入し、敵に味方に供給する死の商人ともなり、その上、あらゆる物資の供給によつて、権力支配組織化に、揺るぎない地位の確保に勉めた。

他方、権力的推移は、徐々にその内的矛盾を、弛緩として暴露しはじめ、最も彼等にとつて力弱く、不平に充ちた一角を動じ、再度神意（天意）の抬頭となり、それが大義名分となつて意識活動を誘発し、反抗の火蓋が切られ、権力奪取の爲めの闘争を喚起し、物資資本に左右せられる、現実的人心を構成するに至つた。

彼等権力把握者、及びその支持者達から、その大義名分と云う、大衆偽瞞の巧妙なる詐術を除去するなら、何程の命運が約せられるであろうか？

即ち、意志及び意識に訴える、意志による偽瞞の構想なしには、支配の成立はなく、権力史的転換と変移、及び、その持続は有り得なかつたと云い得るのである。

見よ、今になお、権力による支配は、そして政治は、その意志のもとになされつつある。

マルクシズムと云い、労働者独裁と云う、こうした大義名分のもとにある、共産党と云う政統治下にあるソ聯、及びその衛星国は、現にその悩みを悩みつつある。

はじめにユーゴの分離独立があり、次ぎに衛星国の叛乱があり、近くは中共に対する権謀術数の破綻、拮抗がある、等々。これ等は如実に、以上の消息を実証し物語るものである。

法律とは強要する意志、そのものの表現の仮称であり、教育や宗教、近くはソ聯と中国に於けるマルクシズムそのものは、支配を是認せしめるための方便に過ぎず、意識への麻痺剤としての役割りを果たし、意識活動に対する、為政者の使用する去勢手段、あるいは煽動使喚し、操縦するためのものに外ならない。

現にこの二十世紀の時点に於てさえ、教祖の言は、数百万の宗徒の吉凶禍福を左右し、従順を下僕たらしめている。

この民衆自身の痴呆と迷蒙の意志故に、権威と宗教は持続されている。

こうした権力支配や権威による、制圧と威迫と懐柔の中で、民衆は文化の実質的功績を積み重ねてきた。それは彼等にとつて尤も手近かな、生活的な表面に於ける創造である。

木を切るための斧や鋸、板を削るためのカンナ、釘の頭を平たくし、ヒダまでつけた、こうした余りにも世間的にありふれたものを、作り考えた始めの人達の功績は、現に地上隅なく存在し、生活する資となり、日本の建築文化の基本的条件の大半を占めている。が

すでに人々の心からはその名も人も忘れられている。

銅を熔かし、銅線を始めに作った人は誰であろう。これがなかったら、エジソンの発明も発見も日の目を見ることがないであろう。

これ等凡てを始めに作った人達は、野心から作ったものではなく、自身の必要と他との関連に於て、創造性を発露した個性に於ける意志による賜物であり、作らずにはいられない、人間性そのもののなした業である。

こうした個性的な発展が永い歴史の間に、衣を食を住を、充実進化させるのであって、個性ある、創造性を余議なくされている人間なればこそ、文化の実体なのである。

即ち民衆こそ歴史の創造者なのである。

言葉は誰から、いつ、どこから始まったものであろうか？ 絵を描き、その絵を字に創作したのは誰か？ これ等はみんな庶民自身の個性的な創作になるものであり、知識はその間に蓄積され、こうした共有と連帯によって産れた、人類不滅の財宝は、歴史上に沈潜する事があっても、平等の原理として継続されている。

然るに共有である可きものや、社会的連帯の基本が、私欲と巧利性にと汚濁された時、即ち権力と權威によって庶民を蹂躪し、収奪する野蠻が遂行され、言葉も文字も知識もそして教育までも独占され、あまつさえ、社会的習慣までに作り上げられている現実なのである。

なお、物質的文化は、意志及び、意識活動の介在なしには創造されないものであり、意志と記憶と経験の媒介を経た、創造的意欲と技術こそ、あらゆる建設、創作、発明発見の母体であつたのである。

人類の歴史はその特殊性である意志によって作られ、意志によって相伝された記録であると共に、人類史は多様な因子のもとになり、その内の、意志による創造の分野は広く、深く、且大であつた事を私は信ずる。

三、経済事情に左右された史観

飢餓の防衛と生活的必要のための生産関係が、人間の生活を発展維持せしめた、即ち食う事によって生存は保持された。

原始人は、その食糧を得るために、山谷を跋渉し、その目は野獣の如く輝き、危険を冒して闘い捕えたであろう、その捕獲したばかりの野獣の生肉に、噛りつきむさぼり食つたであろう原人、あるいは野生の果肉を煩張る妻子を見守る原始の男達、又ある時は、多量の獲物を引提げて、奇声を発して叫び、呼び、凱歌をあげて、祝いの歓喜にひたりもしたであろう。

その彼等にとって、火の発見は、食事情に飛躍的な変化をもたらす因となった。